

同窓会

川島 徹

障子を開けるなり「やあ、どうも」男が勢いのいい声でだれにともなく声をかけた。料理を前にして座っている十名ほどが一斉に顔を綻ばせた。入口に今回の幹事係二名が小卓を前にして座っていた。「関所か。いくらだっけ?」「案内状にあったでしょ」一人が人差し指を立てた。男は笑いながらスボンの尻から財布を抜き出して一万円札を手渡した。済むとすぐ前のテーブル席に進んで「どっこいしょ」と言って空いている席に座った。「今日は全員参加なの?」「いや、Kだけが欠席らしい」「やっぱりか。どうしちゃったのか」「糖尿だからな」「血圧も高くて目まいがするらしいよ」「そうか。可哀相になあ」「しかし、こうして毎年顔を合わせて元気な姿を見せられるのは嬉しいことだよな」「そうね。この歳になつては、そのことが一番大切なことだし、喜ばしいことだよな」「みんなが顔を揃えて酒が飲めて旨い料理が食べられる。これ最高の人生だよなあ」

女性が二人姿を現した。続いて三人が関所を通過した。

「どこに座ればいいのかしら」「どこでも空いている席に……」空席が五つ六つある。

大学時代の同窓会である。二十名いる同学部の同級生が定年退職した翌年から毎年開いている。年二回で一回は夏に日帰り、一回は冬に温泉旅館で泊まりで行うことにだれが決めるともなく決まってしまった。二十名とも三十八年間勤めあげて年金生活をしている。七割が教員をしていた。同窓会は今年で十年目を迎える。そのために夏は例年通りだが、冬には三泊で温泉巡りをすることに決まった。どこを回るかは次の幹事係が決める。男七名。女十三名。生活習慣病を患っているK一人を除いて全員が元気である。男性軍は六十半ばから急に衰えを見せてきたが、女性軍は衰えるどころか益々顔を脂ぎらせている。それでも顔じゅうに広がった小皺や少なくなりつつある頭髮は隠せない様子だった。「K君だけが欠席らしいわね」「そうなんだよ。ほんとうに可哀相だよなあ」「でも今は糖尿病っていつても医学が発達してるから、たいした病気じゃないんだよ。注射一本でOKなんだよ」「あらそう。そんなに簡単な病気なの?」何人かは初耳のようで驚きをあらわにした。「それじゃ、出席できるんじゃないの?」「そうだけど、奴はなかなか頑固だから、一度決めたら気持ちを変えないから」「そういう人は抜きにして私達だけで楽しくやりましょうよ」「そうよそうよ。去年も楽しかったものねえ。M君な

んか裸踊りまでしちゃってさ。M君がそんなことをするのは全く思わなかったわ。大学時代はまじめ「方で」「年もたてば人間変わるよ」Mはげらげら笑った。「それもそうだわね。みんなさばけてきたしね」「女達は大学時代は本ばかりに嘔りついてコンパに出たことなんかなかったのに。今は酒は飲むし歌は歌うし、全く変わったよ」「でも、結構女達だけで喫茶店なんかには出入りしたのよ」「おれ達はコンパばかり開いてたよなあ。S教授なんかを誘ってさ」「そうだ、あの教授は親しみ易かったなあ、今、どうしているんだか」「国立を定年退職して私大へ行ったけど、もう退職したそうよ」「おれ達と同じ身分になったんだなあ」

「さあ、それでは全員が揃いましたので、同窓会を始めたいと思います」幹事の一人が立ち上がって挨拶した。「早いもので前回の集まりからもう半年が過ぎてしまいました。今日も前回々々同様、時間の許す限り大いに飲み、食べて思い出話に大きな花を咲かせて下さい」乾杯が終わると俄かにビールや酒のコップが動き出し、かん高い笑いやおしゃべりが渦巻いた。「いつの間にかおれ達も七十になっちまったなあ」「全く早いわ。夢のようだよ」「過去は戻らないしねえ」「こうして集まれる間が花だよ。大いに楽しまなくちゃ損だよ」「そうよそうよ」「そうだそうだ」話題は大学時代の思い出である。

「皆さん、お静かに願います。K君から手紙が届いていますのでご披露いたします」幹事が封筒から手紙を引き出した。「同窓会ごころうさま。市内随一の高級料理店での集い、さぞかし旨い料理が並べられ気分よく酔い、限らない思出話の花が開くことでしょう。小生は二回出席しましたが、最初は懐かしさで楽しく過ごせましたが、二度目は話題がなく退屈でうんざりでした。それ以降は私は参加していませんが、参加して倒れでもしたら『無理するからだよ』と笑い話にされるのが関の山でしょう。考えてもみて下さい。我々はもう七十歳です。七十にもなればなによりも自分の時間が貴重になります。私は毎日のスケジュールで生活していて昔話を繰り返して笑い合ったりしている時間はありません。お陰で生活習慣病も大幅に改善され、今は健常者と変わらない状態にまで復調しています。有難いことです。皆さん、せいぜい楽しいひとときを過ごして下さい。私は極上黒松剣菱でも買って一人静かに祝杯をあげることにします。蛇足ですが、夏場の一万円、冬場の数万円の出費は多過ぎませんか。もつともみんなは金持ちだからそのぐらいいの出費はほんのはした金なのでしょうが、私に言わせれば全くの無駄金だと思います」

「なんだこれは！」「おれ達はいったいなんなんだ！」続く言葉はだれの口からも出てこなかった。代わりに額に深い横皺を刻んだ顔や眉間に縦皺を寄せた顔が並んでいた。